

対話者の談話方略が日本語・アラビア語バイリンガル幼児 の言語混合に及ぼす影響

—親の談話仮説 (Parental Discourse Hypothesis) の検証—

ズイヤード アル ファッラージュ

Effect of Interlocutors' Discourse Strategies on Language Mixing by Japanese- Arabic Bilingual Children: An Examination of the Parental Discourse Hypothesis

Ziad AL FARRAJ

Language mixing is a linguistic phenomenon often seen in children who grow up in a bilingual environment. A considerable number of studies on this phenomenon have already been published. However, the actual reasons why bilingual children use language mixing, and the role played by the interlocutors' discourse strategies, are still controversial. The main purpose of this article is to examine the relationship between the strategies adopted by adult interlocutors when they react to children's language mixing, on the one hand, and the children's ways of responding to these interventions, on the other, with the aim to test the validity of the Parental Discourse Hypothesis (Lanza 1992).

The participants in this study were four Arabic-Japanese bilingual children (siblings) all of whom acquired their Japanese language ability at the Japanese nursery they attended. The data was collected before all of the children entered elementary school. The parents of the children are Arabic native speakers; the father is also fluent in Japanese. All other Japanese interlocutors were native speakers. The analysis of the data shows that, with the exception of the Minimal Grasp strategy, there is a correlation between the interlocutors' discourse strategies and the children's overall rate of language mixing. However, a more detailed analysis of the children's language use (Arabic, Japanese, or Language mixing) in response to their interlocutors' discourse strategies shows results that do not match the assertions of the Parental Discourse Hypothesis.

I. はじめに

II. 親の談話方略の仮説

III. 親の談話方略と幼児の言語混合との関係

IV. 幼児の言語発達に影響を与える要因

V. 調査方法

1. 参加幼児と対話者

2. データ収集の方法

3. データ分析方法について

VI. 結果と考察

1. 成人対話者の談話方略

2. 各対話者の方略に対する各幼児の発話タイプ

(1)成人による方略使用に対する幼児の言語混合全般

(2)各対話者の方略に対する長男の発話タイプ

(3)各対話者の方略に対する次男の発話タイプ

(4)各対話者の方略に対する長女の発話タイプ

(5)各対話者の方略に対する三男の発話タイプ

VII. おわりに

I. はじめに

バイリンガル教育学の研究者である Grosjean (2010) は、世界の幼児たちの約半分が2つないし

それ以上の言語に接して成長する事実を指摘している。幼児のバイリンガル化の増加は日本でも例外で

はない。奥田（1997）は、国際化の趨勢に伴い、早期英語教育を望む子どもやその家族、日本在住の外国人家族の幼児、海外在住の日本人児童・生徒の数はいずれも急増しており、日本でもバイリンガル研究の重要性が高まりつつあることを指摘している。こうしたバイリンガル環境におかれた幼児は、2つの言語の狭間で通常の母語環境では見られない言語の使い方をしており、本研究が注目する2つの言語を混合して使う現象はその典型である。バイリンガル幼児による言語混合の現象には、多くの研究者も関心を寄せている（例えば、Lanza, 1992, 1997; Genesee, Nikoladis, Paradis, 1995; Nikoladis & Genesee, 1997, 1998; Deuchar & Muntz, 2003; Takeuchi, 2000; Min, 2011; Juan-Garau & Perez-Vidal, 2001; Heidi, 2007など）。さらに、Mishina（1999）によると、実際に言語の混合がバイリンガル幼児の言語体系の特徴や発展について何を現しているのか、まだ多くの課題が残されている。それに加えて、Lanza（1992）によると、バイリンガル幼児の言語混合に対する対話者の応答の仕方が幼児の言語混合に影響を与える。近年、対話者の応答の仕方と幼児の言語混合の率との関係については様々なアプローチで研究が行われているが、一致した見解は得られておらず、量的データをあつかった実証研究は少ない。

そこで、本研究は、Lanza（1992）に提唱された親の談話仮説（Parental Discourse Hypothesis, 詳細は後述）の正当性を実証的に検証し、日本で育つバイリンガル幼児が2つの言語を併用する言語混合の現象に焦点を当てる。Lanzaによると、親の談話方略（Parental Discourse Strategies¹; 後述）には5つある。本研究では就学前段階の日本語・アラビア語のバイリンガルきょうだいの幼児4人（以下、バイリンガル幼児）を対象に、彼らが親及び日本人（成人）と会話をする際に、どのように言語混合を行うかを調査し、各種の実証データを収集し、分析する。研究の主目的は、幼児の言語混合が、親の談話仮説が想定するように親（または成人対話者）の使用する談話方略の影響を受けるか否かを検証することである。

II. 親の談話仮説

親の談話仮説は、Lanza（1992）が提唱した親の談話方略（Parental Discourse strategies）に、Nicoladis & Genesee（1998）が Parental Discourse Hypothesis という名称をつけたことによって、研究者間で知ら

れるようになった仮説であり、親が幼児と対話する際に使用する談話方略が、幼児の言語使用にどのような影響を与えるかを理論化したものである。

親の談話仮説では、親がバイリンガル幼児と相互作用をする際に、親による言語の使用の仕方が幼児の言語混合に影響すると考えられている。親が幼児の言語混合に対して特定の応答や方略を使用すると、それに応じる形で幼児は言語混合を使ったり避けたりしながら、親の使用する言語に合わせて言語を選び、コミュニケーションをする。一方、言語混合を含む幼児の発話に親が理解を示すと、言語混合を使用してもよいものと理解し、2言語を混ぜたままコミュニケーションを継続することが報告されている（Lanza 1992, 1997）。Lanzaの研究の対象になった幼児は、ノルウェー居住のTomas（男児）とSiri（女児）の2名で、兄妹ではない。研究当時Tomasは2歳で、Siriは1歳11か月であり、いずれもノルウェー語と英語のバイリンガルであった。この幼児とそれぞれの親（いずれも英語が優勢）との会話データを分析した結果、幼児の言語混合は偶然に生じるのではなく、親の談話方略によって、幼児の言語混合を促進するケースと抑制するケースがあることが示唆された。また、Lanaza（1997: 263-267）は、親とバイリンガル幼児の間で交わされる会話を分析し、5つの親の談話方略（幼児の使用言語への切り替え、両言語による会話の継続、幼児の使用言語以外での繰り返し、幼児の使用言語以外での意味推測、幼児の使用言語以外での質問）があることを示した。これらの方略は、図1のように連続体（continuum）をなしており、左端がバイリンガルの状態で使われる方略、右端がモノリンガルの状態で使われる方略となっている。例えば、親がバイリンガル方略（連続体の左端）ではなくモノリンガル方略（連続体の右端）を使用すると、親の母語を使用する傾向があることを示している。

BILINGUAL STRATEGY _____ MONOLINGUAL STRATEGY
Code Switching Move-On Adult Repetition Expressed Guess Minimal Grasp

図1：Lanzaの親の談話方略モデル（Lanza 1997：268から引用）

これらの5つの談話方略は次のように定義される。

1) Code Switching Strategy (コード切り替え)

発話中の言語混合や発話間の言語混合が含まれる。この方略は、先行する発話で幼児が使用した言語に従って、成人対話者がそれに合わせて自身の母語を切り替えるという方略である。

2) The Move-On Strategy (会話移行)

成人対話者が幼児の言語混合の意味を察知し、何らかの方法でどちらかの言語を使用して、会話を継続させようとする方略である。

3) Adult Repetition Strategy (繰り返し)

成人対話者が質問以外の形で、幼児の言語混合発話の意味を繰り返す方略であるが、幼児が使用しない方の言語で繰り返して言う場合のことを指す。

4) Expressed Guess Strategy (表現推測)

成人対話者は幼児が言ったことが何を意味するか推測し、その推測が正しいかどうかを幼児に確認するため、幼児が使用しない方の言語で、正否を問う質問の形で聞く方略である。

5) The Minimal Grasp Strategy (最小限の把握)

幼児が何を言おうとしているのか理解できないため、対話者は幼児が使用していない方の言語で WH 疑問文によって尋ねる方略である。

Ⅲ. 親の談話方略と幼児の言語混合との関係

多くの研究者がこの親の談話仮説について実証データを収集・分析し、親の談話方略と子どもの言語混合との関係について検証している。Takeuchi (2000) は、オーストラリアに在住している日本語・英語バイリンガル 4 世帯から、女兒 4 人 (5 歳、5 歳 1 か月、6 歳 9 か月、6 歳 6 か月) と、それぞれの母親の談話を分析した。その結果、母親が上記 5 の最小限の把握の方略を使用すると、子どもの言語使用に影響はなかった。子どもが親の使用した方略後に同じ単語を繰り返したからである。しかし、それ以外の方略を用いた場合、母親がモノリンガル方略を使用すると、女兒たちは母親の母語 (日本語、少数話者) を使用する傾向が見られた。この研究結果は、Lanza の親の談話仮説を支持している。

また、Min (2011) は、台湾に住む中国語・英語

バイリンガルの家庭の 1 人の男児 (2 歳 1 か月歳から 3 歳までの間) を対象に定量データを収集し分析した。その結果、父親が幼児との会話で最も使用した方略は会話移行であるが、母親の場合は最小限の把握の方略である。さらに、親の談話方略と子どもの全体的な言語混合率との間に正の相関関係があることを明らかにした。親がモノリンガル方略を利用すればするほど子どもの全体的な言語混合率は低下し、親がバイリンガル方略を使うとそれに応じて子どもの全体的な言語混合率が高まるという Lanza の親の談話仮説を支持する結果となった。

一方、親の談話仮説を支持しない研究結果も報告されている。Nikoladis & Genesee (1998) は、Lanza の親の談話仮説を検証するため、次の課題を設定した。彼らは、親の談話方略が子供たちの言語混合と言語選択にどう影響したのかについて 2 段階で検証した。フランス語・英語バイリンガル世帯から、年齢の範囲が 1 歳 9 か月から 2 歳までの子どもたち 5 人を対象に調査を行ったが、親の談話仮説は支持されず、子どもの言語混合には、親の談話方略が直接かわるのではなく、社会的あるいは言語的な要因の相違に起因すると主張した。

また、Genesee, Nikoladis, Paradis (1995) は、幼児の言語混合に、彼らに内在化する言語の優勢・劣勢と親の言語混合率が影響するかを検証した。フランス語・英語バイリンガル世帯の男児 3 人、女兒 2 人の子どもたち 5 人 (1 歳 10 か月から 2 歳 2 か月まで) を対象に調査を行った結果、幼児の言語による影響は見られたが、親の言語混合率が影響するという証拠は得られなかった。

さらに、Deuchar & Muntz (2003) は、スペイン語・英語バイリンガル世帯で育てられた女兒 1 人を対象として、1 歳 7 か月から 2 歳 6 か月までの期間に調査を行ったが、女兒の言語混合と親の談話方略との間、女兒の言語混合率と親の言語混合率との間、女兒の優勢言語と女兒の言語混合率の間すべてにおいて、有意な相関関係がないという結果になった。

また、山本 (2017) は、親の談話方略が子どもの言語使用を規定するのではなく、逆に子どもの言語使用が親の言語使用に影響を及ぼすと述べている。

Ⅳ. 幼児の言語発達に影響を与える要因

以上のように、親の談話方略と子どもの言語混合との関係を調査した研究の結果は、これまでのとこ

ろ一致しておらず、親の談話仮説の検証に至っていない。その理由として、研究の対象となった子どもたちの言語獲得や言語使用の環境が統一されていないことがあげられる。彼らは、異なる社会的背景から来た家族であったり、経済的な状況が著しく異なっていたり、あるいは親の教育レベルも異なっていたことが考えられる。幼児が言語を浴びている時間の長さ（インプットの量的側面）と深さ（インプットの質的側面）なども同様であったかどうか疑問である。このような様々な要因が幼児の言語発達過程に重要な役割を果たすと主張する研究がある。

Paradis (2011) は、言語刺激の量（言語を浴びている時間の長さ）と質（言語環境の豊かさ）が幼児の第二言語習得に関連することを報告した。Lanza (1997: 317) も、幼児が各言語（母国語と第二言語）で受けるインプットの量も重要な要因であり、対象にした2幼児のインプット量が同じく浴びたかどうか疑問に思ったと述べる。

また、Hoff & Elledge (2005) は、言語刺激の量だけでなく、母親の教育がバイリンガル幼児の学習水準に影響を与えると述べている。Hoff (2003) も、バイリンガル幼児の産出語彙サイズに親の社会的経済的な状態と母親のスピーチ特性が影響することを示している。

以上の先行研究から、親の談話仮説を検証するためには、幼児や親の置かれた環境を可能な限り統一してデータ収集を行うことが理想と言えよう。そこで、本研究では、言語刺激、インプット、経済状況、母親等の条件を統一するため、同一家庭の幼児4名を対象に、以下の3つの研究課題を検討する。

研究課題1：同一家庭の幼児の言語混合に対し、成人対話者（両親・日本人）はどのような談話方略を用いるか。

研究課題2：対話者による方略使用と、それに対する幼児たちの全言語混合の頻度との間に相関関係があるか。つまり、バイリンガル方略使用の頻度が高ければ高いほど、言語混合の頻度も高くなり、反対に、モノリンガル方略使用の頻度が高ければ高いほど、言語混合使用の頻度も低くなるか否かを検討する。

研究課題3：成人対話者が使用した談話方略に対して、幼児はどのような発話タイプ（アラビア語、日本語、言語混合）を選択するか。

V. 調査方法

1. 参加幼児と対話者

本研究の参加者は4人の幼児（きょうだい）で、全員が筆者の子どもである。彼らの年齢構成、保育園の入園時期、そして日本語に接したおよその期間を表1にまとめる。

表1 幼児の年齢構成等

幼児の年齢順	長男	次男	長女	三男
研究開始時の年齢	4歳9か月	3歳9か月	2歳8か月	1歳8か月
保育園に入園時の年齢	1歳11か月	1歳	1歳1か月	10か月
日本語に接した期間	2年9か月間	2年9か月間	1年6か月間	9か月間

彼らは全員が日本で生まれ、母国には一度も帰国したことはない。幼児の両親（筆者と筆者の妻）はアラビア語母語話者である。来日時の父親の日本語能力はJ-CAT²というテストによると中級であったが、母親の日本語能力はまったく無い状態であった。来日から約5年が経過した調査時、母親の日本語能力は来日前とほとんど変わっていないが、幼児から何回も同じ日本語を聞いたり、父親がアラビア語で通訳を入れたりすることで、日本語の定型文程度であれば少し理解できるようになった。しかし、母親が幼児とコミュニケーションをするときは今もアラビア語のみである。一方、来日から約5年後、父親の日本語能力は伸び、幼児との会話で時々日本語を交えることもあるが、ほとんどアラビア語で行っている。幼児が浴びる主な日本語のインプットは保育園においてである。日本人の来客の機会もあるが非常に稀である。

日本人対話者は3回とも別人であり、筆者と同じ大学の関係者の女性であり、3人のうち1人は父親がイラク人で、残り2人は両親が日本人である。3人とも大学でアラビア語を勉強したことがあるが、アラビア語の知識は非常に限定的で、単語をわずかに知っている程度なので、アラビア語を話せないとすべきである。データ収集の前に2回幼児らの家庭に来てもらった。幼児らと接触して相互に身近な存在になるためである。

2. データ収集の方法

本研究では、以下の3つの対話場面（各30分間）をビデオ撮影したものをデータとした。データの収集期間は、7か月間で、この間、約3か月半に1回

のペースで、3回のデータ収集を行った。

- 1) 幼児と母親の対話場面：アラビア語による会話（筆者がビデオ撮影を担当）。
- 2) 幼児と父親の対話場面：大半がアラビア語であるが、必要に応じて日本語でも会話（母親がビデオ撮影を担当）。
- 3) 幼児と日本人の対話場面：日本語による会話（筆者がビデオ撮影を担当）。

この3つの対話は、データ収集の条件を統一し、幼児間の比較を行いやすくするために、同じ手順で行われた。最初の10分はウォーミングアップとして、遊びながら自由に会話をしてもらった。次の10分間は対話者が幼児にフラッシュカードを提示し、幼児に説明を求めながらやり取りをしてもらった。最後の10分間は対話者が幼児に絵本（『BAKKARの冒険』という絵本）を見せ、読み聞かせて、幼児とのやりとりを行った後、幼児に絵本の内容を説明してもらった。

3. データ分析方法について

本研究では、発話を特定するために、収集したデータをユニットに分けなければならない。筆者はFoster et al. (2000) が提唱したAS単位 (the Analysis of Speech Unit) の発話の分け方を基礎にして、対話者と幼児が産出した発話を分けることにした。Foster et al. によるAS単位とは、独立した句、またはサブ句であって、そのいずれかと関連する従属句から構成される、1人の話者の発話として定義される。筆者は本研究でその定義に従って、収集したデータの内容をアラビア語単位、日本語単位、言語混合単位という3つの発話タイプに分けた。アラビア語単位は、完全にアラビア語のみによる発話である。日本語単位は完全に日本語のみによる発話である。言語混合単位は、両方の言語の要素（アラビア語要素と日本語要素）から成り立つ発話である。これらの単位と、先に述べた、Lanaza (1997: 263-267) の5つの親の談話方略（幼児の使用言語への切り替え、両言語による会話の継続、幼児の使用言語以外での繰り返し、幼児の使用言語以外での意味推測、幼児の使用言語以外での質問）によって発話をコーディングした。

コーディングした発話データは以下の手順で分析した。第一段階は、幼児が言語混合を起こした際の大人の対話者の応答を、どのような談話方略が使用

されたのかという観点から検討し、場合ごとに使用された方略を特定するものである。第二の段階では、大人の対話者が使用した方略に対して応答した幼児の発話タイプ（アラビア語発話 [A]、日本語発話 [J]、混合発話 [言語混合]）を特定する。次いで、対話者が用いた方略と幼児の言語選択に関係があるか否かを数量的に考察する。

VI. 結果と考察

1. 成人対話者の談話方略

Lanaza (1997: 263-267) の5つの親の談話方略と同様に、本研究で収集した発話データにおいても5つの親の談話方略が観察された。以下、それぞれについて、発話データの例を挙げる。なお、幼児の言語混合に二重線を、成人対話者の談話方略に下線を示す。

1) Code Switching Strategy (コード切り替え)

例：長男と父親の場合、第二回目で発生した会話

1父親：وشو كامان؟ wa shū kamān? (そのほかは?)

2長男：豆

3父親：أه، 豆، ليش طيب؟ بتوجع يعني؟ ah,...liš ṭayib bitūj-ū ya'ny? (あ、豆、何でかな？痛いということ?)

4長男：لانو هيك! l'annū hek! (だって、そう!)

2) The Move-On Strategy (会話移行)

例：次男と日本人の場合、第三回目で発生した会話

1次男：泳ぐ、これは غواصة こう、こう
ghawwāsah... (これは潜水艦こう、こう)

2日本人：何しているかな？

3次男：お水に入る。

3) Adult Repetition Strategy (繰り返し)

例：長男と父親の場合、第二回目で発生した会話

1長男：はだいろ！ اسمه هادي! asmoh... (はだいろ、名前は肌色!)

2父親：اسمه يعني لون الجلد asmoh ya'ny laūn aljild (名前は肌色という意味です)

3長男：جلد jild (肌)

4) Expressed Guess Strategy (表現推測)

例：長女と日本人の場合、第二回目で発生した発話

- 1 日本人：何じゃ？
- 2 長女：لقلق laqlaq (つる)
- 3 日本人：ラクダー？
- 4 長女：ラクダーじゃない！

5) The Minimal Grasp Strategy (最小限の把握)

例：次男と母親の場合、第二回目で発生した発話

- 1 母親：طيب هاي؟ tayib hāy? (で、これ?)
- 2 次男：ももたろう！
- 3 母親：ももたろう؟ شو يعني؟ shū ya'niy (ももたろうってどういう意味ですか)
- 4 次男：يعني يعني هوخ! ya'niy ya'niy khuwkh (意味、意味、もも)

例：長男と父親の場合、第一回目で発生した発話

- 1 長男：きのこ、きのこ
- 2 父親：يعني؟ ya'ny? (意味は?)
- 3 長男：فطر! fitr! (きのこ!)

以上に示した談話方略の割合と頻度を表2と図2、3、4、5に幼児別にまとめて提示する。

表2 成人対話者が幼児の言語混合に対して使用した方略(回数・%) 全3回

成人談話方略	長男		
	母親(回数・%)	父親(回数・%)	日本人(回数・%)
コード切り替え	25 (32.9)	23 (27.1)	4 (11.8)
会話続行	33 (43.4)	33 (38.8)	15 (44.1)
繰り返す	10 (13.2)	5 (5.9)	2 (5.9)
表現推測	2 (2.6)	6 (7.1)	3 (8.8)
最小限の把握	6 (7.9)	18 (21.2)	10 (29.4)
合計	76 (100.0)	85 (100.0)	34 (100.0)
成人談話方略	次男		
	母親(回数・%)	父親(回数・%)	日本人(回数・%)
コード切り替え	15 (27.3)	18 (34.6)	5 (11.6)
会話続行	29 (52.7)	15 (28.8)	20 (46.5)
繰り返す	5 (9.1)	5 (9.6)	6 (14.0)
表現推測	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (9.3)
最小限の把握	6 (10.9)	14 (26.9)	8 (18.6)
合計	55 (100.0)	52 (100.0)	43 (100.0)
成人談話方略	長女		
	母親(回数・%)	父親(回数・%)	日本人(回数・%)
コード切り替え	6 (24.0)	18 (40.9)	3 (13.6)
会話続行	12 (48.0)	11 (25.0)	12 (54.5)
繰り返す	2 (8.0)	5 (11.4)	1 (4.5)
表現推測	0 (0.0)	2 (4.5)	3 (13.6)
最小限の把握	5 (20.0)	8 (18.2)	3 (13.6)
合計	25 (100.0)	44 (100.0)	22 (100.0)
成人談話方略	三男		
	母親(回数・%)	父親(回数・%)	日本人(回数・%)
コード切り替え	8 (53.3)	6 (42.9)	1 (6.7)
会話続行	4 (26.7)	5 (35.7)	7 (46.7)
繰り返す	2 (13.3)	2 (14.3)	1 (6.6)
表現推測	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
最小限の把握	1 (6.7)	1 (7.1)	6 (40.0)
合計	15 (100.0)	14 (100.0)	15 (100.0)

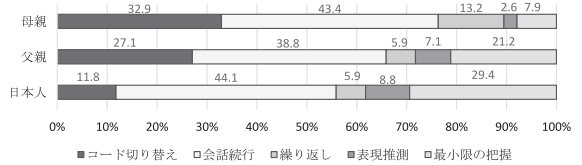


図2 成人対話者が長男の言語混合に対して使用した談話方略 全3回

上図2によると、長男の言語混合に対して母親が最も多く使用した方略は会話続行方略で、第二に多用したのはコード切り替え方略であった。母親は日本語の知識が非常に限定されているにもかかわらず、語彙レベルのコード切り替えを使用していた。おそらく、母親はできるだけスムーズに会話を継続させようとして、たまたま覚えている単純な日本語の言葉を用いたものと考えられる。Goodz (1989)によると、バイリンガル家庭での親は、幼児との会話をするとき、幼児に分かりやすいと思うような語句や文構造を使う(その語句がもう一方の親の言語であったとしても)。さらに、Mishina (1999)は、バイリンガル家庭での保護者の言語混合は、コミュニケーションを維持・促進するために使用される方略の1つであり、親は幼児のために、より簡単な用語を選択し、言語を切り替えるのかもしれないと述べている。

父親は、母親より「最小限の把握」の方略を多く用いたことが分かる。理由としては、父親の日本語能力が母親より高く、幼児が日本語で言っていることを理解できる上、幼児にアラビア語で応答することを強制させることが出来るからだと考えられる。さらに、この最小限の把握の方略の使用割合を父親と日本人とで比べると、比較的近い傾向がみられるものの、日本人対話者のほうが高かった。この理由は、日本人対話者は幼児が言っているアラビア語の意味が理解できないため、さらに説明を要求するケースが多かったからであろう。それに加えて、日本人対話者があまり使わなかった方略はコード切り替えである。アラビア語が話せないため、その方略を使用すると、会話を続けることができないからである。一方で、最も高頻度に用いた方略は母親、父親と同じく、会話続行方略である。幼児が言っていることは脈絡で分かり、それぞれの話者は使用している言語を維持しながら会話を行ったと考えられる。すなわち、本研究では長男の言語混合に対して各対

話者が最も使用した談話方略は、他の研究の結果と同様、会話続行である。例えば、Takeuchi (2000)によると、彼の調査で各母親が最も使用した談話方略は会話続行の方略である。また、Min (2011)においては、父親が幼児との会話で最も使用した方略は会話続行であるが、母親の場合は最小限の把握の方略である。

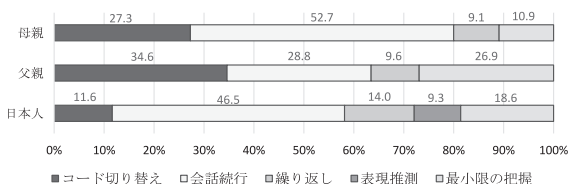


図3 成人対話者が次男の言語混合に対して使用した談話方略 全3回

次に、次男の場合である。上図3によると、母親は長男のときと同様、最も頻繁に使用した方略は会話続行の方略で、次に多いのはコード切り替え方略であった。それに対して、一度も使用しなかった方略は表現推測の方略であった。父親も母親と同じく一度もそれを使わなかった。しかし、日本人対話者は低い割合ではあるが、その方略を9.3%使っていた。こうした違いの理由としては、両親の場合は、この次男が言っている日本語の意味を推測できるし、ほかの談話方略（会話続行やコード切り替え）を使用すれば補助することができるのに対して、日本人対話者の場合は、幼児が言ったアラビア語の意味の確認を求めるケースもあったからと考えられる。すなわち、対話者は幼児の言語混合に対しては、全ての談話方略を使用するわけではないと考えられる。Takeuchi (2000) は、対象にした4世帯のうち、1人の女兒の言語混合に対してその母親が使用した談話方略は唯一会話続行であると述べている。

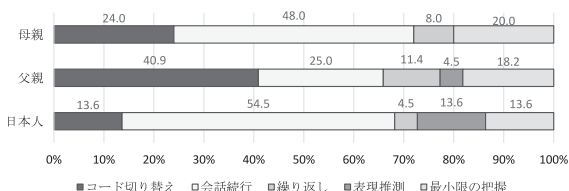


図4 成人対話者が長女の言語混合に対して使用した談話方略 全3回

次いで、長女についてである。上図4に見るよう

に、母親は、次男の場合と同様に表現推測の方略は一度も使用していなかった。それに対して、最小限の把握の方略を多く用いる傾向が見られた。父親の最小限の把握の方略の割合とほぼ同じである。その増加の理由として、母親は長女が言っている日本語の意味が分からないケースが多いため、説明を要求しているからと考えられる。日本人の場合は母親同様、最も多く用いた方略は会話続行方略である。しかし、二番目に多く用いられた方略はコード切り替え、表現推測、及び最小限の把握で、三方略が同率に使用された。

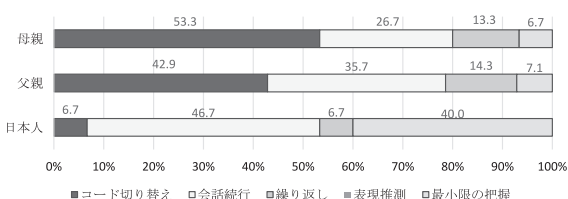


図5 成人対話者が三男の言語混合に対して使用した談話方略 全3回

最後に、三男の場合である。上図5を見ると、各対話者が一度も使用しなかった方略は表現推測方略である。これに対して、父親と母親は二人ともバイリンガル方略であるコード切り替えと会話続行の方略が最多である。その解釈としては、他のきょうだいより三男はまだ幼いので言語体系は未発達であり、語彙サイズも限定されているという条件が影響していると思われる。すなわち、両親としては、三男の発話を励ましたり、会話をスムーズにしたりするために、確認や説明を要求するモノリンガル方略よりも、バイリンガル方略を使用したであろう。一方、日本人対話者は最小限の把握の方略の使用割合が非常に高かった。理由として考えられるのは、三男が発話中に日本語よりアラビア語を使ったため、アラビア語の分からない日本人はモノリンガルの方略を使用したのだろうということである。

2. 各対話者の方略に対する各幼児の発話タイプ

本節では、上に述べた各対話者の方略に対して、幼児がどのような発話タイプを用いたのかを検討するが、その前に、まず対話者の使用した方略と、それに対する幼児の全体的な言語混合の頻度の間の相関関係があるか否かについて検討する。すなわち、研究課題2に対する議論を行う。以下の表3にその

発話タイプを回数と%を示す。

表3 各発話者の談話方略に対する各幼児の発話タイプ

談話方略	(長男の応答、回数・%)								
	母親			父親			日本人		
	A	J	LM	A	J	LM	A	J	LM
コード切り替え	19 (76.0)	1 (4.0)	5 (20.0)	11 (47.8)	9 (39.1)	3 (13.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	1 (25.0)
会話続行	29 (87.9)	1 (3.0)	3 (9.1)	25 (75.8)	4 (12.1)	4 (12.1)	1 (6.7)	11 (73.3)	3 (20.0)
繰り返し	10 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (60.0)	0 (0.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	2 (100.0)	0 (0.0)
表現推測	2 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (66.7)	1 (16.7)	1 (16.7)	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)
最小限の把握	5 (83.3)	0 (0.0)	1 (16.7)	8 (44.4)	5 (27.8)	5 (27.8)	3 (30.0)	3 (30.0)	4 (40.0)
合計	65	2	9	51	19	15	7	18	9
談話方略	(次男の応答、回数・%)								
	母親			父親			日本人		
	A	J	LM	A	J	LM	A	J	LM
コード切り替え	6 (40.0)	1 (6.7)	8 (53.3)	6 (33.3)	7 (38.9)	5 (27.8)	3 (60.0)	2 (40.0)	0 (0.0)
会話続行	24 (82.8)	0 (0.0)	5 (17.2)	11 (73.3)	2 (13.3)	2 (13.3)	2 (10.0)	16 (80.0)	2 (10.0)
繰り返し	4 (80.0)	0 (0.0)	1 (20.0)	3 (60.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	1 (16.7)	4 (66.7)	1 (16.7)
表現推測	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (25.0)	2 (50.0)	1 (25.0)
最小限の把握	2 (33.3)	2 (33.3)	2 (33.3)	4 (28.6)	5 (35.7)	5 (35.7)	3 (37.5)	4 (50.0)	1 (12.5)
合計	36	3	16	24	15	13	10	28	5
談話方略	(長女の応答、回数・%)								
	母親			父親			日本人		
	A	J	LM	A	J	LM	A	J	LM
コード切り替え	6 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (27.8)	8 (44.4)	5 (27.8)	0 (0.0)	3 (100.0)	0 (0.0)
会話続行	11 (91.7)	1 (8.3)	0 (0.0)	8 (72.7)	2 (18.2)	1 (9.1)	1 (8.3)	11 (91.7)	0 (0.0)
繰り返し	2 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (40.0)	2 (40.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)
表現推測	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	2 (66.7)	1 (33.3)	0 (0.0)
最小限の把握	3 (60.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	2 (25.0)	6 (75.0)	0 (0.0)	1 (33.3)	2 (66.7)	0 (0.0)
合計	22	2	1	18	19	7	4	18	0
談話方略	(三男の応答、回数・%)								
	母親			父親			日本人		
	A	J	LM	A	J	LM	A	J	LM
コード切り替え	6 (75.0)	2 (25.0)	0 (0.0)	4 (66.7)	2 (33.3)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
会話続行	3 (75.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	4 (80.0)	1 (20.0)	0 (0.0)	4 (57.1)	3 (42.9)	0 (0.0)
繰り返し	2 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (50.0)	1 (50.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
表現推測	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
最小限の把握	1 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)	0 (0.0)	5 (83.3)	1 (16.7)	0 (0.0)
合計	12	3	0	9	5	0	11	4	0

A: アラビア語、J: 日本語、LM: 言語混合

(1)成人による方略使用に対する幼児の言語混合全般

ここでは、対話者の使用した方略と、それに対する幼児の全体的な言語混合の頻度の間に相関関係があるか否かについて検討する。そのため、各方略に対するそれぞれの幼児の言語混合の発話の様子を図6に示す。

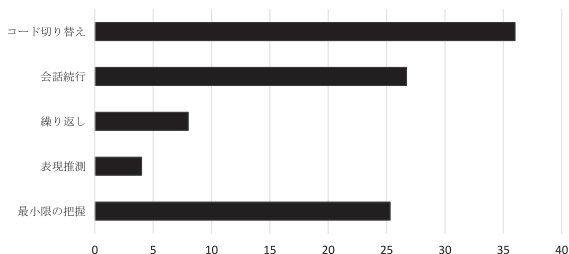


図6 母、父、日本人の談話方略に対する幼児の言語混合率 全般

上図6によると、最小限の把握の談話方略以外、

親の談話仮説が提案した説明に該当する傾向が明らかである。親の談話仮説によるとコード切り替え方略がバイリンガル方略であるので、幼児の言語混合も他の方略に対する場合より多く起こっていることが分かる。また、幼児の言語混合の率は最小限の把握を除いて、モノリンガル方略の方に（つまり、グラフの下の方に）進めば進むほど、言語混合率も減少している。すなわち、使用されている方略と言語混合の頻度の間に、相関関係があることが言える。Nicoladis & Genesee (1998) は親の談話仮説を検証した結果、それを否定している。彼らは、親が使用した談話方略と幼児の全体としての言語混合率の間に相関関係がないという研究結果を得たのである。Nicoladis & Genesee (1998) の研究結果は本研究の結果と異なっているが、最小限の把握の談話方略に関する説明については、両方の研究の結果は一致する。本研究でも、対話者がモノリンガルの最小限の把握の談話方略を使用すると幼児の全体としての言語混合の頻度は減少せずに急増している。

上に述べた本研究の結果は、対話者の方略に対して幼児が用いた言語混合の頻度の合計についてである。本研究の4人の幼児の年齢は互いに約1年間の差があるため、対話者の談話方略に対する応答の仕方と能力も異なっている。さらに、表3を見ると、三男と長女は対話者の各方略使用に対して、言語混合の使用が非常に少ないので、その点では信頼性は低いと考える。そのため、次の節では、各対話者が多く使った方略に対する各幼児の応答タイプに注目して論じる。

(2)各対話者の方略に対する長男の発話タイプ

この項では、研究課題3について、長男が大人の方略にどう応じたかを検討する。最初に、母親が用いた方略に対して長男が使用した発話タイプについて述べる。前述したように、母親は会話続行方略を最も頻繁に用いたが、親の談話仮説の説明によると、この方略に対して幼児は応答にあたって言語混合を使い続けるはずである。会話続行方略は連続体の左端に位置するバイリンガルの方略であって、親がその会話続行方略を使用すると、幼児は言語混合の使用が許されると理解するからである。しかし、図2の母親の方略と表3の長男の発話タイプとを突き合わせてみると、母親の会話続行方略の使用に対する長男の応答は、言語混合の継続 (9.1%) より

も、母親の母語（アラビア語）を高頻度（87.9%）に使用している。本研究では、長男の言語選択は母親の会話続行の方略使用に関連しているというよりも、母親の母語能力（アラビア語）を考慮したためではないかと考える。これを支持する証拠は、表3にあるように、母親が使用した方略全てに対して長男の使用した発話が圧倒的にアラビア語であるという事実である（総数76回のうち65回）。したがって、この長男・母親のケースでは、対話者の談話方略使用に対する幼児の応答についての親の談話仮説の主張は否定されるという結論となる。

続いて、母親のコード切り替えと繰り返しの方略の使用に対して、長男の応答はアラビア語でそれぞれ76%、100%であり、言語混合による応答は20%、0%であった。すなわち、ここでも長男は母親の言語を知っており、母親がコード切り替えと繰り返しの方略を用いても、言語混合ではなくアラビア語で応答したのである。したがって、コード切り替え方略使用の場合も、親の談話仮説の主張と一致しないことが分かる。

次に、父親との場合を検討する。前述した通り、最も多く用いた方略は会話続行とコード切り替えの順であった。そうすると、親の談話仮説により、これらの方略に対する発話タイプは言語混合というタイプが高頻度に発生すると予想できる。しかし、上の表3を参照すると、父親が会話続行方略を用いたとき、長男は言語混合と日本語を使用した（両方も使用率はわずか12.1%）が、最も多くアラビア語（使用率75.8%）で応答したことが分かる。つまり、母親と同じく、父親が会話続行の方略を使用したときの応答も言語混合の発話タイプよりもアラビア語を使用してコミュニケーションをしたのであった。この結果でも、親の談話仮説の会話続行方略に関する主張を否定することになる。

続いて、父親がコード切り替え方略を用いたときも、応答は言語混合の発話タイプ（13.0%）より、アラビア語の発話タイプ（47.8%）を多く用いた。しかし、日本語の使用頻度（39.1%）もかなり高かった。これは、父親が長男との会話でアラビア語も日本語も用いたので、どの言語も使用可能であると判断したためではないかと考えられる。結局、親の談話仮説はこの結果に当てはまらないことが指摘できる。

さらに、表3で父親の使用した方略全てに対する

長男の発話を見ると、アラビア語が85回のうち51回である。結果として、この長男・父親の場合、対話者の談話方略使用と幼児の応答に関連性がなく、幼児が相手の言語を区別して適切な言語選択をして会話を行ったと考えるのが妥当であろう。

日本人が長男と会話をした際に多く用いた方略について述べる。前節の図2で見たように、会話続行方略と最小限の把握方略の順であった。これを上表3で見ると、日本人対話者の会話続行方略使用に対して、長男は高頻度（73.3%）で日本語使用を維持していたのに対して、言語混合の使用の割合は20%であった。この結果は親の談話仮説の会話続行方略に関する説明に当てはまらない。それに加えて、日本人が最小限の把握の方略を使用した際には、親の談話仮説によれば、最小限の把握はモノリンガルの方略なので、長男は日本語で応答するはずであるのに、長男は同じような割合でアラビア語（30%）、日本語（30%）、または言語混合（40%）を使用していた。むしろ日本語より言語混合の発話タイプの方が多い。

再び表3によって、この日本人の使用した方略の全数と、それらに対する長男の発話から、日本語が最も多く用いられていることが分かる。全34回のうち18回である。結果として、この長男・日本人の場合では、対話者の談話方略使用と幼児の応答に関連性はないようである。むしろ、大人の談話方略の使用によるというよりも、幼児が対話相手の言語を識別して自分の言語使用を選択していると考えられる。De Houwer (1990:90, 98-99)によれば、一般的にバイリンガル幼児は、対話相手が理解し対応できると知っている言語で話しかけるようである。つまり、幼児にとって対話相手の言語能力を知ることが、その幼児の言語選択の重要な要因であると述べている。本研究でも、親の談話仮説が主張する最小限の把握方略に関する解釈は当てはまらないと結論づけることができる。

(3)各対話者の方略に対する次男の発話タイプ

ここでは各対話者の方略に対する次男の応答タイプについて述べる。最初に母親との会話を取り上げる。上図3によると、母親の最も多く用いた方略は会話続行とコード切り替え方略である。この2つはともにバイリンガル方略であるが、表3によると、母親の会話続行に応じた次男の言語混合の継続的使

用は17.2%に過ぎず、圧倒的に母親の母語（アラビア語）を使用している（82.8%）。したがって、次男のこの言語選択は母親の会話統行方略に関連しているというよりも、母親の母語を考慮したためではないかと考えられる。この結果は、親の談話仮説が仮定する連続体の説明に当てはまらない。

次に、母親のコード切り替え方略使用についてである。親の談話仮説によると、幼児はこれに対しても継続的に言語混合を使用してもよいと考える。次男は40%をアラビア語で応じ、53.3%を言語混合で応えているので、何とか親の談話仮説の主張に合致している。次男が母親の母語に合わせて、アラビア語で応答を行っていたケースも多いということも指摘すべきではあるが、ここでは、次男が母親のコード切り替え談話方略使用に対して言語混合の発話タイプを用いて会話したという結果から、親の談話仮説に当てはまると結論しておく。

次に、父親が用いた方略に対して次男が選択した発話タイプについて検討する。上図3に見たように、父親の最も多く用いた方略は、母親とは逆の順だがやはりコード切り替えと会話統行方略である。すると、親の談話仮説によると、次男からは言語混合の発話が高頻度に発生することが想定できる。上表3を参照すると、父親がコード切り替えを用いたときに、確かに次男は言語混合の発話を使用している（27.8%）が、それより日本語の発話による応答の方が多く分かる（38.9%）。さらに、次男はアラビア語でも応答している（33.3%）。次男はアラビア語と日本語をほぼ同程度に使用していたのである。これは、次男が父親の言語能力を考慮して、どちらの言語を使用してもよいと判断したのではないかと考えられる。したがって、ここでも親の談話仮説の説明は否定される。

また、父親の会話統行の方略に対しても次男の応答は言語混合（13.3%）よりもアラビア語発話タイプ（73.3%）がはるかに多かった。これは親の談話仮説の説明には当てはまらない。要するに、対話者の使用している方略は幼児の応答の仕方に影響を与えるかもしれないが、最も重要な要因は幼児から見た対話者の母語であると考えられる。

次に、日本人の使用した方略に対する次男の応答の仕方の場合である。日本人が次男との会話で最も多く用いた方略は会話統行の方略であり、次に最小限の把握方略である。親の談話仮説の説明による

と、対話者が幼児の言語混合に対して会話統行方略を使用する場合、幼児は言語混合を継続するはずである。しかし、上表3を見ると、日本人の会話統行方略に対して、次男は高頻度に日本語を使い続けており、その頻度は80%に達する。また、アラビア語と言語混合によるそれぞれ応答が10%であった。この結果は親の談話仮説が主張している説明に当てはまらない。一方、親の談話仮説によると、最小限の把握はモノリンガルの方略であるため、次男の応答は日本語となることが期待される。上表3を参照すると、次男は日本語（50%）、アラビア語（37.5%）、または言語混合（12.5%）を使用した。アラビア語や言語混合より日本語の発話タイプを用いた方が多い。したがって、アラビア語の応答頻度が高かったことを指摘しなければならないが、本研究では、日本人の最小限の把握使用に対する次男の応答タイプの結果は、親の談話仮説に当てはまると結論することができる。

また、母親、父親、日本人の使用した方略全てに対する次男の応答の全体を見ると、母親の場合は、発話の総計55回のうちアラビア語が36回、父親の場合は52回のうちアラビア語が24回で、時折日本語でも応答していた（15回）。日本人が対話者の場合、発話の総計43回に対して日本語の発話が28回であった。相手の方略の影響よりも、むしろ、幼児自身が対話者の言語を識別して会話を行うと考えられる。

(4)各対話者の方略に対する長女の発話タイプ

ここでは、各対話者の方略に対する長女の発話タイプについて考察する。母親が最も多く用いた方略は上図4に見るように、順に会話統行とコード切り替えの方略であった。会話統行方略に対する長女の応答を上表3で見ると、言語混合は一度も使用していない。長女は母親の母語を高頻度に使用しており、その割合は91.7%に達している。したがって、長女の発話タイプは相手の会話統行の方略に影響を受けたというよりも、母親の母語を選択して会話を行っていたと考えられる。また、母親のコード切り替え方略の使用に対する長女の応答タイプは全てアラビア語で、日本語も言語混合も全然使用しなかった。長女と母親の場合では会話統行とコード切り替えの方略使用と長女の発話タイプに関連性が見られないので、本研究の結果は親の談話仮説の説明に当ては

まらないということが明らかである。

次に、父親が用いた方略に対して、長女の応答はどうだったのだろうか。父親の用いた方略は多い順に、コード切り替えと会話続行の方略である。上の表3によると、父親がコード切り替えを用いたとき、長女は言語混合とアラビア語の発話を同率(27.8%)で使用して応答した。またそれより日本語を多く使用した(44.4%)。要するに、父親のコード切り替え方略に対する長女の応答は、ある程度は言語混合の発話だったが、多く日本語でコミュニケーションをしたのである。したがって、この事例もコード切り替えと会話続行の談話方略に関する親の談話仮説を否定するということが分かる。

続いて、父親が会話続行方略を用いたときも、長女の応答は言語混合の発話の使用よりもアラビア語発話(72.7%)をより多く用いた傾向が見られる。それに対して言語混合の使用頻度は9.1%で最も頻度が低かった。したがって、会話の相手のコード切り替えと会話続行の方略に対する長女の応答は親の談話仮説の説明に当てはまらない。

次に、日本人の使用した方略に対しての長女の応答である。上図4により、日本人が長女との会話で最も多く用いた方略は会話続行で、同率でコード切り替え、表現推測、最小限の把握が続く。表3によると、日本人の会話続行方略使用に対して、長女は91.7%という高率で日本語使用を維持しており、アラビア語及び言語混合の発話タイプの使用率はそれぞれ8.3%、0%であった。次に、日本人のコード切り替えの使用に対して、長女の応答タイプは日本語だけであった。さらに、表現推測と最小限の把握の使用に対する長女の応答は、前者にはアラビア語(66.7%)であり、後者に対しては日本語(66.7%)であった。しかし、コード切り替え、表現推測、最小限の把握の方略の使用は非常に頻度が低いため、親の談話仮説の説明に当てはまるか否かは確認できないと言わなければならない。

各発話者の使用した方略全てに対する長女の全発話をみると、母親に対しては、発話総計25回のうちアラビア語での応答が22回、日本人に対する応答は22回中18回が日本語である。すなわち、母親と日本人が相手の場合は、相手の方略ではなくむしろ相手の言語を用いて会話を行ったのである。一方、アラビア語母語話者の父親相手の場合には日本語を使った回数も多かった。父親が両方の言語ができる

ので、自由に使いたい言語(アラビア語か日本語か)を切り替えて会話を行った。すなわち、相手が今使用している応答の仕方ではなく、相手の言語能力が幼児の言語使用に影響を与えられられる。

(5)対話者の方略に対する三男の発話タイプ

ここでは、三男の応答タイプについて考察する。まず、上図5によると、母親が最も多く用いた方略は順にコード切り替えと会話続行の方略であるので、幼児の応答は言語混合の使用を継続すると親の談話仮説は言う。ところが上表3に見られるように、この母親のコード切り替え、会話続行の方略の使用に対する三男の応答は一度も言語混合の発話を使用することなく、応答の75%が母親の母語である。したがって、母親・三男の場合、コード切り替え、会話続行の方略使用と幼児の応答の仕方に関する本研究の結果は、親の談話仮説が主張する説明には該当しない。

次に、父親が母親と同じく最も多く用いた方略はコード切り替え、会話続行の方略である。表3にあるように、父親がコード切り替えや会話続行の方略を用いたときにも、三男は全く言語混合をせず、アラビア語を使用した(66.7%)。したがって、三男と父親の場合でも、コード切り替えや会話続行の方略使用と幼児の言語混合との間に親の談話仮説が言うような関連性は認められない。

最後に、日本人対三男の場合である。日本人の対話者が最も多く用いた方略は会話続行方略であり、次に最小限の把握方略を使用している。親の談話仮説によると、前者がバイリンガル方略であり、後者はモノリンガル方略である。上表3を見ると、日本人対話者の会話続行方略使用に対して、三男はしばしばアラビア語を維持しており(57.1%)、日本語と言語混合使用頻度は順に、42.9%と0%であった。したがって、親の談話仮説が主張する会話続行に関する説明に該当しないことが分かる。

それに加えて、この日本人がモノリンガル方略の最小限の把握を使用した際に、三男の応答は日本語使用(16.7%)よりアラビア語使用が83.3%と高くなっていた。ここでも、本研究の結果は親の談話仮説が主張した説明に当てはまらなると結論づけることができる。

また、各対話者の使用した全ての方略に応じた三男の全発話を上表3でみると、母親の発話15回中

12回がアラビア語で、これは彼の3人のきょうだいと同じ傾向であるが、日本人が相手の場合の会話では、発話の総計15回に対して日本語での応答は日本語ではなくアラビア語の方が多く(11回)、異なった様相を呈している。年齢の面で見れば、三男が幼いため、対話者の談話方略とか母語に関わらず、自分が馴染んだ語彙、使いやすい言葉、あるいは自分の優勢言語を用いたのではないかと考えられる。

VII. おわりに

上述の議論から、本研究の結論を2点述べる。

第一に、会話の相手の使用した談話方略に対して各幼児が用いた全ての言語混合の率の面から見れば、最小限の把握方略の場合以外、相関関係があり、本研究と親の談話仮説の主張した説明は一致するということである。

一方、幼児の言語混合率の全体的な数値ではなく、各対話者の使用した談話方略とそれらに応答したそれぞれの幼児の言語使用(アラビア語、日本語、または言語混合)を詳細に考察すると、親の談話仮説の主張と異なる第二の結果が出てくる。

本研究の第二の結果は、Takeuchi(2000)の研究結果と異なっているが、最小限の把握方略に関する結果と一致する。Takeuchiによると、親の談話仮説を検証して、最小限の把握方略以外は、親の談話仮説が提唱した説明を肯定する結果を出している。本研究の最小限の把握方略に関する結果もTakeuchiの研究結果と一致する。

本研究では、対話者があまり使用していない方略を除いた。その理由は、使用回数が少ないゆえ、分析の結果の信頼性が低くなり、親の談話仮説が妥当かどうかを検証する結果に至らないからである。

対話者の方略に対する幼児の発話タイプの詳細な分析の結果から、以下のことが明らかになった。すなわち、各対話者の使用した談話方略と、それぞれの幼児の応答タイプの間、直接的に有意な関連性は見出されなかった。母親が使用したコード切り替え方略と、それに対する次男の言語混合による応答の場合以外、いずれの場合でも、多く使用された談話方略に対する幼児の応答は、親の談話仮説が主張した解釈に該当しないことが明らかになった。

Lanza(1997)の研究で対象にされた幼児は別々の家庭に属し、したがって異なる環境で育てられたが、調査は同じ時期に行われた。一方、本研究が対

象にした幼児は4人のきょうだいで、年齢は調査開始時1歳8か月～4歳9か月であり、調査は7か月間に3回の連続した期間である。本研究の結果としては、いずれの幼児に関しても、会話の相手が使用した談話方略とその幼児の言語混合の使用の間には直接の関連は見出されなかった。むしろ、日本人と三男の場合以外、各幼児は全体的に対話者の母語に応じて会話を継続する傾向が見られた。つまり、幼児らの応答は対話者が今用いている談話方略に応じたというよりも、対話者の母語が幼児の応答の仕方にも影響を及ぼすという重要な役割を果たしたと考えられる。

ここで、表2に見られるように、各幼児が言語混合を使用した回数には非常に興味深い結果が出ているのでまとめる。それは、4人の幼児のうち、三男(約1歳8か月～2歳3か月)は本研究の約7か月のデータ収集期間中、どの対話者の使用した談話方略に対しても言語混合を一度も使用していなかったということである。対話者の談話方略に対して、三男はアラビア語か日本語のみで応答したのである。

長女(約2歳8か月～3歳3か月)は同じ期間中、日本人の対話者に対して一度も言語混合の発話を用いていなかった。また、母親や父親が使用した談話方略に対しては8回しか言語混合しなかった。

さらに、次男(約3歳9か月～4歳4か月)はその間、各発話者が使用した談話方略に対して言語混合を多用しており、34回も用いたことが確認できる。

長男(4歳9か月～5歳4か月)は、次男とほぼ同じ回数の言語混合を行った(33回)。幼児同士は年齢的に互いにほとんど1年間しか差がないので、この言語混合の使用回数の差は幼児の言語混合の発展の証拠になると考えられる。東(2000:46)によると、言語混合は高度な言語能力が要求される、きわめて有効な言語使用方法の一つである。本研究が調査の対象にした4人の幼児のうち、長女と三男はまだ幼いため、会話の相手の談話方略に対して言語混合をほとんど使用していない。その談話方略に対応するために求められる言語能力が未発達だからである。

三男は年齢的に最も幼く、発話者の方略とは無関係に、相手の言語能力を考慮している、というよりも自分の優勢言語、あるいはよく知っている言葉を使用して対応をしたのではないかと考えられる。しかし、長女の方は、三男より約1歳年長であるため、

対話者が使用した方略に対して言語混合使用を始めたが、その使用は限定され、主に父親と会話をしたときのみであった。したがって、長女はその年齢になって、会話の相手の言語能力によってどの言語を使用すべきかを区別し始めたのではないかと考えられる。その結果、長女は言語混合を使用するときに、三男同様、馴染んだ言語を使ったが、同時に対話者の母語を識別できたということに起因するのではないかと考えられる。最後に、長男と次男は、対話者の方略使用に対して三男と長女より比較的高頻度に言語混合を使用した。2人とも4歳以上なので、言語的にはほとんど安定しており、両言語の使い分け、対話者の母語の識別ができるのではないかと考えられる。

要するに、対話者の話し方に対する幼児の応答は、対話者が使用する方略に関連するというよりも、幼児がある年齢以下の場合、対話者の言語能力（母語）を識別しないで、自分が使いやすい言葉を使うという要因が決定しているのではないか。一方、幼児が特定の年齢を超えた後では、言語発展は安定しており、対話者に対する幼児の応答は相手の言語能力（母語）の識別に起因していると考えられる。

以上をまとめると、本研究の結論づけた結果は親の談話仮説が主張した説明を全面的には肯定できないということである。

注

- 1 Parental Discourse Strategiesを山本(2017) は日本語で「親の談話方略」としているのので、本稿も必要に応じこれに従う。
- 2 J-CAT 日本語テスト はコンピュータによる日本語学習者のインターネット日本語能力自動判定テストである。

参考文献

- Deuchar, M., & Muntz, R. (2003). Factors accounting for code-mixing in an early developing bilingual. In N. Muller (Ed.), *(In) Vulnerable Domains in Multilingualism* (pp. 161-190). Philadelphia, PA: John Benjamins.
- De Houwer, Annick. (1990). *The Acquisition of Two Language from Birth: A Case Study*. Cambridge University Press.
- Foster, P., & Tonkyn, A., & Wigglesworth, G. (2000). Measuring Spoken Language: A Unit for All Reasons. *Applied Linguistic*, 21(3), pp. 354-375.
- Genesee, F., Nikoladis, E., Paradis, J. (1995). Language differentiation in early bilingual development. *Journal of Child Language*, 22, pp. 611- 631.
- Goodz, N. (1989). Parental Language Mixing in Bilingual Families. *Infant Mental Health Journal*, 10(1), pp. 25-44.
- Grosjean, F. (2010) *Bilingual: Life and reality*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Heidi, R. (2007). Codeswitching in triadic conversational situations in early bilingualism. *International Journal of Bilingualism*, 11 (4), pp. 337- 358.
- Hoff, E. (2003). The Specificity of environmental influence: socioeconomic status affects early vocabulary development via maternal speech. *Child Development*, 74(5), pp. 1368- 1378.
- Hoff, E., & Elledge, C. (2005). Bilingualism as one of many environmental variables that affect language development. *Proceedings of the 4th International Symposium on Bilingualism*, ed. James Cohen, Kara T. McAlister, Kellie Rolstad, and Jeff MacSwan, pp. 1034- 1040. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Juan-Garau, M., & Perez-Vidal, C. (2001). Mixing and pragmatic parental strategies in early bilingual acquisition. *Journal of Child Language*, 28, pp. 59- 86.
- Lanza, E. (1992). Can bilingual two- year- olds code- switching. *Journal of Child Language* 19, pp. 633- 658.
- Lanza, E. (1997). *Language Mixing in Infant Bilingualism: A Sociolinguistic perspective*. Oxford: Clarendon Press.
- Min, H. T. (2011). A case study on parental discourse strategies and a bilingual child's code- mixing. 『教育心理學報』, 43 (1), pp. 175- 202.
- Mishina, S. (1999). The role of parental input and discourse strategies in the early language mixing of a bilingual child. *Multilingua*, 18(4), pp. 317- 342

- Nicoladis, E., & Genesee, F. (1997). The role of parental input and language dominance in bilingual children's code-mixing. In E. Hughes, M. Hughes, & A. Greenhill (Eds.), *Proceedings of the 21st Annual Boston University Conference on Language Development*, pp. 422-432. Somerville, MA: Casadilla Press.
- Nicoladis, E., & Genesee, F. (1998). Parental discourse and code-mixing in bilingual children. *International journal of bilingualism*, 2 (1), pp. 85-99.
- Paradis, J. (2011). Individual differences in child English second language acquisition. *Linguistic Approaches to Bilingualism*, 1(3), pp. 213-237.
- Takeuchi, M. (2000). Japanese Parent's discourse Strategies in response to inappropriate language choice by their children. *Japan Journal of Multilingualism and multiculturalism*, 6 (1), pp. 20-44.
- 東昭二 (2000) 『バイリンガルズム 二言語併用はいかに可能か』 講談社現代新書.
- 奥田久子 (1997) 「同時バイリンガルの言語識別能力に関する縦断的実証研究」、『広島修大論集』、第38号、第1号 (人文)、pp. 321-374.
- 山本雅代 (2017) 「受容バイリンガルの言語使用と言語環境：母親の言語使用の経年変化に焦点を絞って」、『言語と文化』、第20号、pp. 17-31.